

## 犬における眼内腫瘍：虹彩毛様体由来腫瘍

鳥取大学農学部共同獣医学科獣医神経病・腫瘍学教育研究分野

准教授 東 和生

### 1)はじめに

眼内腫瘍は、それ自体を主訴に来院される場合もありますが、眼内出血や眼球拡大、充血、緑内障などの主訴で来院した場合に、その原因が眼内腫瘍であったという症例も少なくありません。臨床現場にて時折遭遇する疾患です。眼内腫瘍は主に、ぶどう膜に発生する腫瘍が多く、メラニン細胞性腫瘍(黒色腫、悪性黒色腫)、虹彩毛様体腫瘍、リンパ腫などが知られています。多くの場合は、眼内で腫瘍が増大した段階で発見され、その治療として眼球摘出が実施されます。臨床現場ではメラニン細胞腫瘍に比べ、虹彩毛様体腫瘍に遭遇するケースは少ないのが現状かと思えます。今回、本学動物医療センターに来院した、虹彩毛様体腫瘍の症例を供覧いたします。

症例1：犬、トイ・プードル、去勢済雄、12歳齢

稟告：予防接種実施時、近医にて左眼の眼内出血を発見。

所見：左眼、細隙灯顕微鏡にて水晶体後方一面に充填血管を有する膜様物(図1、A)。顕著なセルフレア(図1、B)。左眼、超音波検査にて内側より境界明瞭な腫瘤様高エコー源性物。後局部から虹彩根部へ連続する高エコー源性膜様物(図2)。左眼眼圧、12 mmHg。経過・治療：飼い主の希望もあり、抗炎症剤内服にて経過観察。初診より1箇月後に、左眼眼圧上昇(36 mmHg)、強い疼痛の発現を認めたため、左眼眼球摘出術実施。

診断：左眼 眼内腫瘍(疑い)、緑内障、ぶどう膜炎、網膜剥離(疑い)

病理診断結果: 左眼、虹彩毛様体腺癌

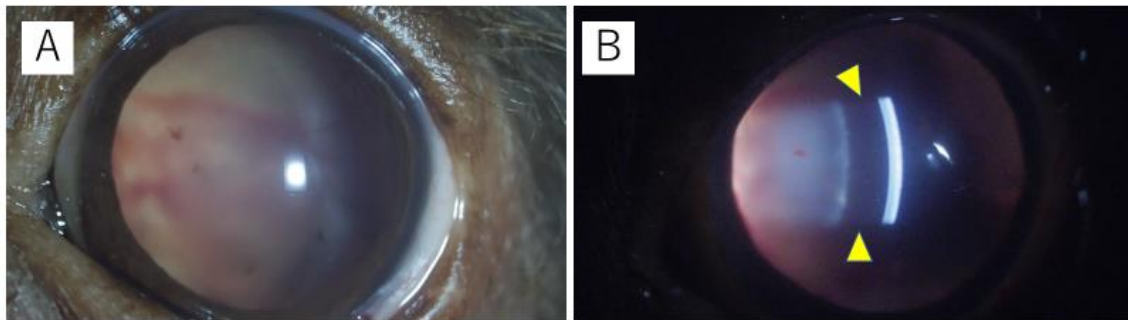


図1. 症例1の左眼、細隙灯顕微鏡検査所見。

水晶体後方一面に膜様物および顕著なセルフレア(B: 矢頭)を認めた。

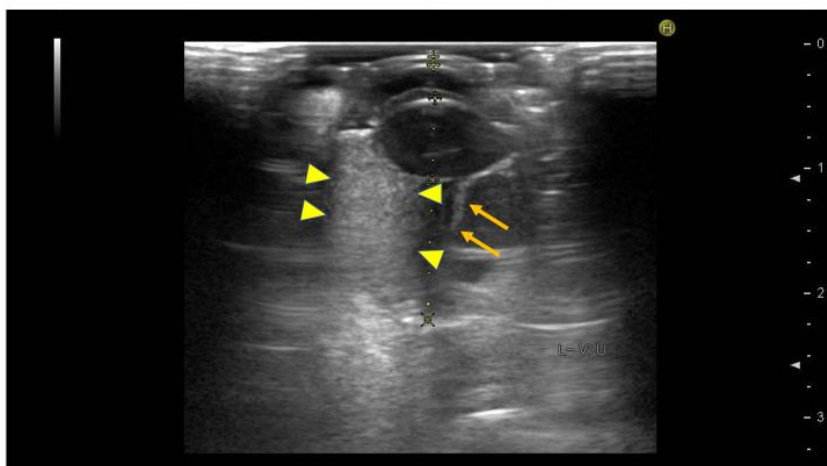


図2. 症例2の左眼超音波検査所見

内側より境界明瞭な腫瘤様高エコー源性物を認めた(矢頭)。また、後局部から虹彩根部へ連続する高エコー源性膜様物が確認された(矢印)。

症例 2：犬、ゴールデンレトリバー、未避妊雌、10 歳齢

稟告：左眼の充血。

所見：左眼細隙灯顕微鏡検査にて、虹彩裏面に実質性病変が存在(図 3、A および B)。

前房には白線様浮遊物が存在。左眼、超音波検査にて前房～硝子体腔における占拠性病変(図 4)。強い毛様充血を認める。左眼眼圧 27 mmHg。

診断：左眼 眼内腫瘍(疑い)、ぶどう膜炎、緑内障、水晶体脱臼

治療：左眼眼球摘出術実施。

病理診断結果：左眼、虹彩毛様体腺腫

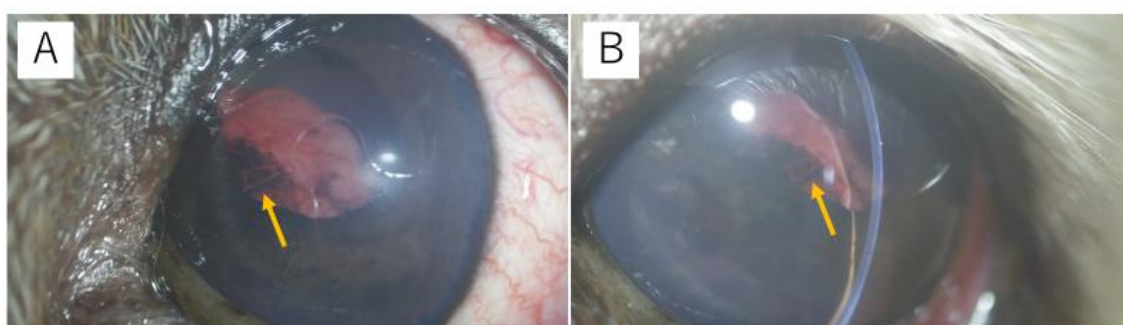


図 3. 症例 2 の左眼、細隙灯顕微鏡検査所見

虹彩裏面に実質性病変が存在していた。腫瘤と虹彩の癒着も確認された(矢印)。

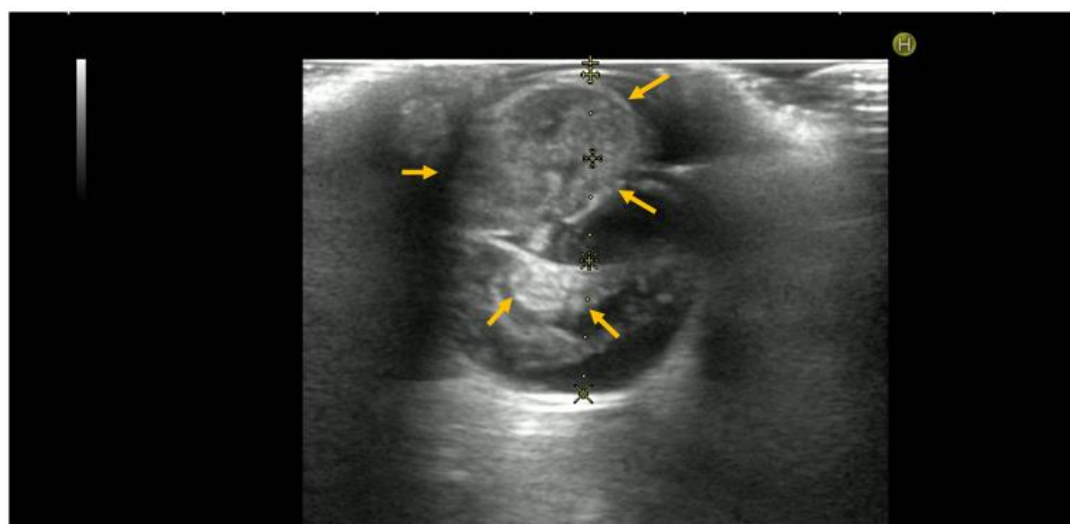


図 4. 症例 2 の左眼超音波検査所見

前房～硝子体腔における占拠性病変(矢印)を認めた。

虹彩毛様体腫瘍は、悪性腫瘍であっても遠隔転移は非常にまれとされています。しかし、増大した腫瘍が隅角を閉塞するなどすれば、緑内障を併発します。また、ぶどう膜炎や網膜剥離等を併発している場合も散見されます。細隙灯顕微鏡での観察が可能な場合もありますが、前房内での出血などがある場合は観察困難なことも多く、超音波検査などにより腫瘍性病変の存在の有無を確認します。治療は腫瘍が大きい場合、緑内障・強いぶどう膜炎などを伴う場合は眼球摘出が選択されます。腫瘍の大きさ・局在などによっては腫瘍のみの摘出も実施可能です。獣医療においては、手術時間・術後合併症などを考慮し眼球摘出術が選択される場合が多いと思います。

#### <参考図書>

- ・ Veterinary Ophthalmology 5th Edition (Wiley-Blackwell)
- ・ Slatter's Fundamentals of Veterinary Ophthalmology 6th Edition (Elsevier)
- ・ 犬と猫の眼科疾患パーフェクトアトラス「診る目を鍛える 150 章」(インターズー)
- ・ カラーアトラスよくみる眼科疾患 58(インターズー)

他